



「良書ご案内」

書籍名	はじめての短歌	著者名	穂村 弘
出版社名	河出文庫	発行年月	2016年10月
書籍名	はじめての短歌	著者名	高田 ほのか
出版社名	メイツ出版	発行年月	2021年5月

万葉集は、奈良時代7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた日本最古の和歌集で、4500首以上も集めたものです。古今和歌集は平安時代(905年、醍醐天皇の勅命)に編纂され、貴族階級の人々の「たしなみ」として詠まれました。

明治までは和歌、明治維新以後の作品は短歌として理解されています。

江戸時代に発祥した俳句、川柳と比べて短歌は1300年の歴史があります。

私たちは、普段「生きのびる」世界と「生きる」世界をごちゃごちゃにして生きています。「生きのびる」とは、社会的に承認された価値を大切にした生き方です。効率的で、意味があり、正しいもの、値段のつくもの、名前のあるもの、強いもの、大きいもの等社会的に価値があるものを追いかけるというよりは、むしろ追いかけている生活です。

「生きる」とは、ビジネスの世界の考え方とはまるで正反対のことに価値が置かれます。「効率的でない」「意味がない」「お金にならない」など日常と、ものの価値がずれています。私たちは、日常的に効率第1、実務一辺倒でバリバリ働いています。しかしそういう人生だけでは、どうしても見えてこない人生のあり方というものがあるように思われます。

私たちは、普段そこそこ社会と折り合いをつけて生きています。作家の遠藤周作が「私は生活はしてきたが、人生はしてこなかった。」と語ったことがあります。食うために働き、求めに応じて書いてきた。しかし本当の自分を生きてこなかった。遠藤さえ、その様な述懐をしています。社会の大勢を占める価値観とは異なった価値観がある。生まれてきた意味の根幹をなすものが確かにある。

短歌を学ぶということは、そういった新しい価値に気づくことです。短歌を学ぶことは人生を学ぶことに通じます。短歌は、「生きる」ことに価値を置いた詩です。「生きる」ことは、少し覚悟が求められます。

短歌入門は、当面この2冊でなんとかかなりそうです。

岩城

編集後記

上の記事になぞらえてではないですが、私は俳句情報を。偶然TVで見た松尾芭蕉に関する番組で、意外と知らぬ情報があつたのでお知らせを。まず出身地は三重県伊賀市あたり、そして29歳で上京。根っからの俳句青年だったのかと思いきや、神田上水(江戸川)の改修工事に携わり、様々な職業や身分の人々と幅広く交流した俗人でもあった等。ただこの頃から職業は俳諧師となる、ところが突然、37歳にして隠居生活に。転居先は深川。理由は諸説有。このあたりからは教科書にある俳人、松尾芭蕉像なのかと思いきや、代表作『奥の細道』も芭蕉隠密説もあるとか?! 知らないことが多すぎる!! 皆様も短歌、俳句、詩などを創作するのの一興では? 夏草や 兵どもが 夢の跡(芭蕉46歳) 51歳で大阪にて亡くなった芭蕉、病床で詠まれた「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」は心が揺さぶられる句と言えます。

発行所：株式会社ライフデザイン研究所

所在地：〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-87サビィル2F Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067 編集人 伊藤